

20100017 (No. 17)

【症例】62歳、男性 【傷病】下咽頭癌

【目的】右頸部痛、投薬の効果が切れた時にできる限り緩和している状態にと依頼される。

【東洋医学的所見】

咽頭摘出のため筆談のみ。右頸部が癌のせいでズキツといたみ、手術の後遺症で引き攣った痛みが強い。三焦経上であった。常に痛みがあり、投薬で鎮痛している。裏熱虚、手少陽経脈病、血瘀と診断した。

【治療方法】

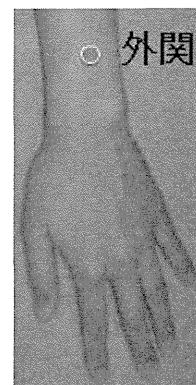
使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm（セイリン製5分-02番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1～4mm）、体調、部位によって鍣鍼を使用。鍣鍼は補法を目的に金鍼、寫法を目的に銀鍼を使用した。

使用経穴は外関、三陰交、裏三里を使用した。

【結果】

開始当初は治療前後であまり変化が得られなかったが、回数が進むにつれ、僅かではあるが治療前後で変化が見られるようになった。しかし、咽頭癌術後患者は「声が出せない」といったストレスが強いため、治療効果を望むのは非常に難しいと考えられた。鍼灸治療効果時間は直後から1時間程度のみ。

【治療開始時の状態】ターミナル後期



20100018 (No. 18)

【症例】 74 歳、男性

【傷病】 非ホジキン病

【目的】 鎮痛薬の効果が切れると左上腕の痛みが出現するため依頼

【東洋医学的所見】

重力がかからなければ、痛みなく外旋、内旋できる。しかし、少しでも重力がかかると重だるく痛む。

服薬によって痛みはないが、疼くような感じがある。夜間に痛みが強くなる。食欲は低下傾向。盗汗あり（本人も驚くほど）。下肢麻痺のため足背部の浮腫があり、リハビリ週 1 回、それ以外は看護師によるマッサージが行われている。裏寒虚実錯雑、肝脾不和、手少陽経脈病、気滞血瘀と診断した。

【治療方法】

使用鍼：直径 0.12 mm、長さ 15 mm（セイリン製 5 分-02 番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1~4 mm）、足三里には直径 0.18 mm、長さ 50 mmを使用し、刺入深度 1cm にて行う。

使用経穴は液門または外関、三陰交、内庭、外内庭、侠溪、足三里。

【結果】 上腕の痛みは経絡的に末端部に配穴を行い、二穴を選穴し治療を行った。初診時、治療直後「あまり変化はない」と患者本人は言っていたが、明らかに腕を挙上した時の苦痛表情が無くなっていた。治療回数を増やすごとに、痛みが消失し、ダルさが残っていたが、20 診目で完全に消失したことから終了と判断（筋力低下による、物を保持した時のだるさはある）。

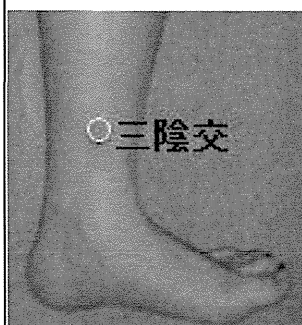
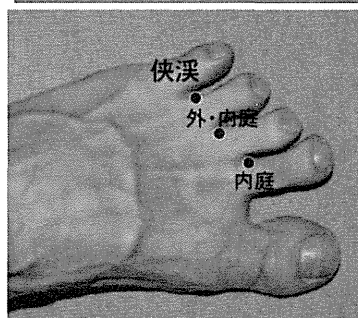
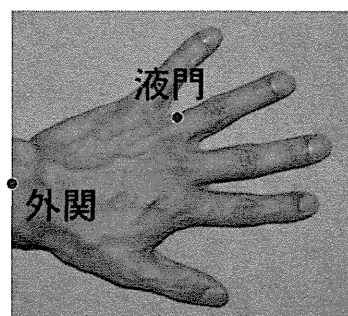
経過観察と共に、下腿浮腫に対しての治療を開始。低栄養であるため、食欲を上げる治療を行う。食欲は上昇したが、胸水、心

室に水の貯留が確認される。

4 月より傾眠傾向が強くなった。

上肢の痛み、ダルさは筋力低下を除外して考えると、鍼灸治療介入する事により症状は軽減され、1 か月経過した頃から上肢の痛みは消失し、経過観察内（全身状態の治療のみ）でも痛みが再発する事はなかった。

【治療開始時の状態】 ターミナル中期



20100019 (No. 19)

【症例】86歳、男性 【傷病】脾臓癌、肝転移

【目的】医師より癌性疼痛ではないため麻薬を投与する事も出来ないので、腰部の痛みに対する症状の緩和を依頼される

【東洋医学的所見】

2/9 から腰の痛みが増す。(NRS=4~5)、痛みの性質は重だるい、張った様な痛み。昔から同じ痛みあり。しかし、ここ最近はなく、急に再発した。部位 L2~3 相当(腎俞付近)。食:前の病院では食べられず 20kg 減少するが、ここにきて 3kg 戻った。便:酷い時は 1 週間でない。今は薬で 3 日に 1 回無理やり出している。下腿冷えあり、太溪軟弱、後溪に索状硬結、下腿胃経緊張

裏寒熱・虚実錯雑、脾腎陽虚、足の太陽経脈病、気虚・気滞血瘀証と診断した。腰部の痛みに対し、経脈病の改善を目的として経絡上の末梢経穴を使用、全身状態の改善のため活血化瘀の治療を開始する。

【治療方法】

使用鍼:直径 0.12 mm、長さ 15 mm (セイリン製 5 分-02 番鍼)を使用し、刺入深度は切皮程度 (1~4 mm)、足三里には直径 0.18 mm、長さ 50 mmを使用し、刺入深度 1cm にて行う。

使用経穴は太衝、後溪、三陰交、足三里、京骨と束骨の間。

【結果】

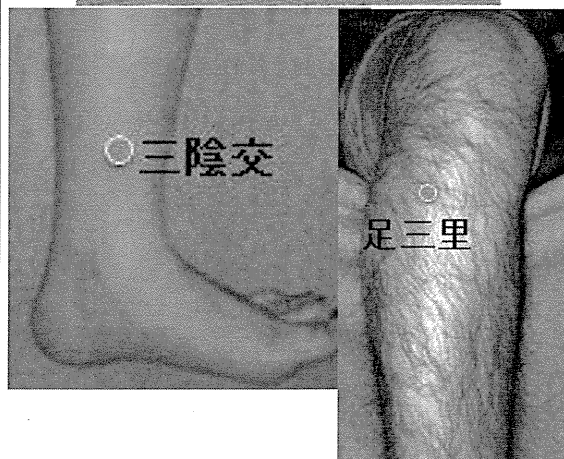
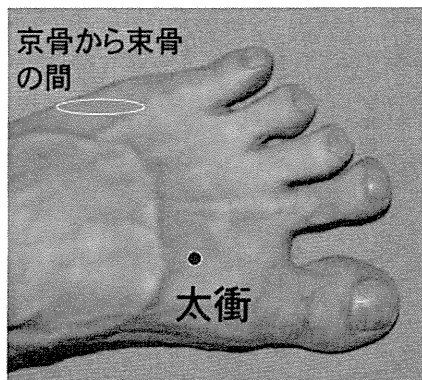
腰部の痛みは開始当初 4~5 程度であったが、治療前後で死前期になるにつれて NRS=5~8 の強い痛みが出現することがあったが、治療直後には NRS=0~2 と改善傾向がみられた。

死前期には痛みだけでなく、強い便秘とな

り、それに対する治療も行っていたが、とにかく病院食が合わないという事で食さなくなったのが大きな原因の一つだった。問診時に「どんなものなら食べられますか?」と尋ね、食べられるものを患者から聴取できたが、スタッフと話す機会を待たず、時間が経ってしまった。もっと早めにスタッフと相談し、対策がとれたのでは考える。

鍼灸治療効果は 1 日から 2 日目の朝には以前ほどではないが痛みが戻ってくるということだった。

【治療開始時の状態】ターミナル中期



20100020 (No. 20)

【症例】71歳、男性 【傷病】下咽頭癌

【目的】肩甲間部から頸部にかけて引っ張られたような痛みがあるため、鎮痛を目的とする。

【東洋医学的所見】

筆談のみのため、詳細を聞くと腕がだるくなることで必要以上の内容を聴取する事はできなかった。

寝方が悪いのか、左右のケンビキ（肩甲間部）の筋が引っ張られる痛み（L】R）。体の向きによってはだるく感じる。左手の浮腫あり（点滴による可能性も…）、こむら返りも起しかける事度々ある。下腿浮腫。目がかすみやすい。顔色：黒

裏寒虚実錯雑、肝血虚、腎気虚、手太陽経脈病、手足少陽経脈病、気虚血瘀と診断し、肩の痛みは経脈病の改善を目的として経絡上の末端経穴にて治療を行う。

【治療方法】

使用鍼：直径0.12mm、長さ15mm（セイリン製5分-02番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1~4mm）、足三里には直径0.18mm、長さ50mmを使用し、刺入深度1cmにて行う。ただし、状態経過に応じて鍍鍼（金鍼）治療に切り替えて、治療を行った。

使用経穴は液門または外関、後溪、侠溪、太溪、三陰交。

【結果】

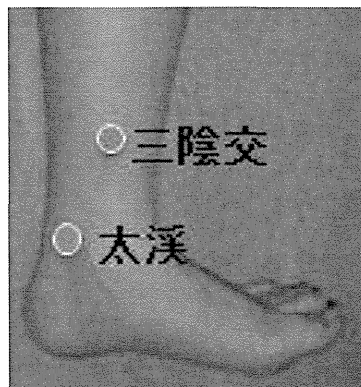
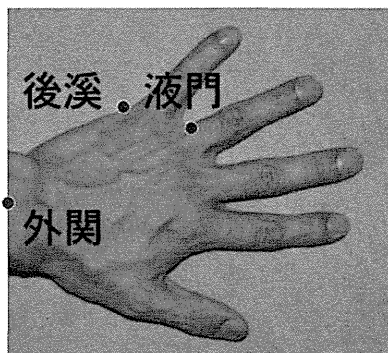
初診時から、治療前後で軽減がみられた。回数を重ねる事でNRS=5~7→2と大きく変化する事もあった。しかし、その事で、患者の中で「もっとしてもらったら治る」という考えが生まれ、何度も説明するも、治療後は必要に追加治療を迫られ、気をつけて行うも、過剰刺激となり、倦怠感が強

くなる事もあった。

また、『話す事の出来ない』ストレス、死への不安感を家族に打ち明けられない悩みも募っていき、スタッフへの要求が強まっていった。

死前期はロピオン朝、夕の中心静脈注射施行により疼痛コントロールができていた。今回の症例を含め、咽頭癌患者は「話せない」ストレスが解消されない限り、七情の乱れを整える事は出来ず、効果的な除痛は非常に難しいことを痛感した。鍼灸治療効果の持続は直後から3時間程度。

【治療開始時の状態】ターミナル中期



20100021 (No. 21)

【症例】85歳、男性 【傷病】下咽頭癌

【目的】ベッドのギャギアップ(上半身を起こす)する際に苦痛表情あり、疼痛緩和を目的に行う。

【東洋医学的所見】

気管チューブのため、話す事できない。痛み・苦痛を訴える際はどのタイミングで訴えるか看護師でも分からない。ただ、注入時のベッドのギャギアップの際によく苦痛表情を見せるとのこと。皮膚は色黒く、問いかけに対しては首を軽く振る程度。特に運動機能に異常はないが、体力が殆んどなく腕を動かす事もできない。陽明経の熱が強い

状態が時間をかけて見られないため、少ない情報から裏寒虚、腎虚、足陽明経脈病、気虚・血瘀と診断し、通経活絡を目的に円皮鍼による軽微刺激にて行う。

【治療方法】

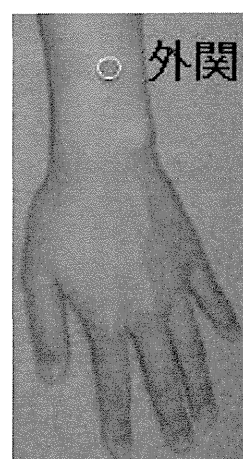
使用鍼：直径 0.2 mm、長さ 0.6 mm (セイリン製：円皮鍼) を使用して行う。

使用経穴は外関、内庭、外内庭、俠溪とする。

【結果】

疼痛の有無以外、一切のコミュニケーションがとれず。唯一の評価は看護師によるギャギアップ時の表情のみであった。1 診目の直後効果は不明であったが、2 診目までの看護記録からはギャギアップ時の苦痛表情が無くなっていたとのこと。鍼灸治療効果の持続時間は1日。

【治療開始時の状態】ターミナル後期



20100022 (No. 22)

【症例】 94 歳、男性

【病傷病】 肺癌・C3～4 骨転移

【目的】 頸部の癌性疼痛緩和

【東洋医学的所見】

患者本人は「あー」という呻吟と首の振り方で痛みを訴えるのみ。評価は看護師のカルテ記載から評価。初診時、睡眠中であつたため、どこが痛いのか不明瞭。また、寝起きであつたため、脈診や、配穴をするために触れると直ぐに振り払われる。医師からだいたいの疼痛部位を確認し、三焦経、小腸経の異常と考え、症状の強い三焦経より行う。

【治療方法】

使用鍼：突然の体動があるため、鍣鍼（金鍼）にて治療を行った。

使用経穴は液門を行う。

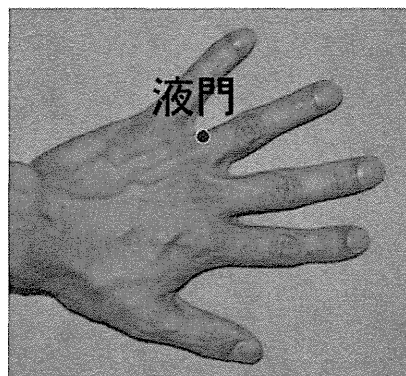
【結果】

一診目、触れると直ぐに振り払われたりしたので、殆ど何もせず終わる。（上肢は点滴による浮腫がありできなかった）患者の次女から 3/2 に「入院時より、呻吟が軽減している事に安心している」とのコメントがあつた。

二診目、軽度刺激により覚醒あり、治療を行った後、睡眠に入られる。

二診目の次の日（約 24 時間後）に看護師による疼痛確認に対し、首を横に振った事から痛みは緩和されていると判断された。

【治療開始時の状態】 ターミナル後期



20110001 (No. 23)

【症例】69歳、男性。

【傷病】食道癌、肺・縦隔リンパ節・腎転移

【目的】肩甲間部から背部の癌性疼痛緩和し、患者本人も投薬の減量を望んでいるため主治医より依頼

【東洋医学的所見】

鍼灸治療介入当初では菱形筋の緊張、膈俞から肝俞にかけて痛みあり。喉が詰まった感じがするという。イライラしやすい、飲酒を好むことから、裏虚実共雜寒熱錯雜、肝胃不和、気虚・気滞・血瘀と診断した。治則を疏肝理気とした。

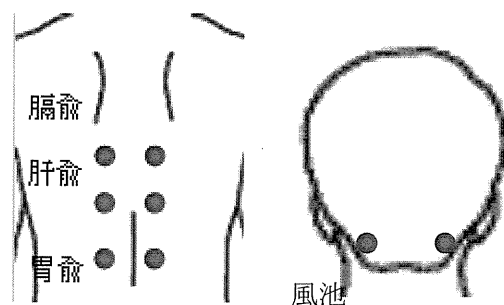
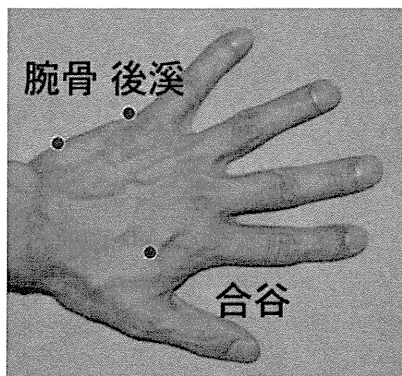
【治療方法】

使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm（セイリン製5分-02番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1~4mm）とする。体調に応じて皮膚に接触するだけの鍣鍼を使用した。鍣鍼は補法には金製、瀉法には銀製を使用。使用経穴はその日の患者状態に応じて、後溪または腕骨、膈俞、肝俞、胃俞、風池、合谷とした。飲酒を好み、外泊時には必ず宴会をしていたということもあり、外泊後には下腿に浮腫が認められ、陰陵泉を追加していた。

【結果】常に重だるい様な痛みがあり、身体を動かしても張り付いているような感じという症状に対し、鍼灸治療を介入した。NRSの数字では治療前後では痛みの変化は6~7→6~7といった変化が全くない。しかしながら、痛みの部位は肩甲骨の間から、胃俞・胃倉まで位置が動いており、患

者本人も「さっきと位置が動いた。さっきのところは痛くない」と驚いていた。また、宴会後は必ず便秘を起し、下剤を処方されるも気休め程度で殆ど出ることはないということだったが、鍼灸治療を始めてから下剤を飲まなくても出た。という変化が認められた。麻薬の投薬量は死前期に向け増量していった。印象としては「死」に対する恐怖感が非常に強く、眠れない日々が増えていたこと、不安性呼吸困難もあったが、鍼灸治療を受ける間は落ち着き、治療中入眠に入られることが多々見られたことから、やや有効であった症例と考える。

【治療開始時の状態】ターミナル中期



20110002 (No. 24)

【症例】79歳、女性。

【傷病】腎臓癌(術後)、仙骨転移

【目的】仙骨転移による足先の痺れ

【東洋医学的所見】

鍼灸治療介入時、左大腿後面から下腿外側にかけてベッドから起き上がる時にズキッとした痛みもあるが、投薬直後のため痛みはなく、痺れを中心に行っていくことにした。痺れは全体的にあるが、細かく調べると左右共に第5趾(胆経、膀胱経)外側が強く痺れるとの事。

痺れがきつく歩かずにいたため、ストレスが強く、日中でもウトウトした感じが常にあった。

裏虚熱、足少陽・太陽経脈病、気虚・血虚と診断した。

【治療方法】

使用鍼:直径0.12mm、長さ1.5cm(セイリン製5分-02番鍼)を使用し、刺入深度は切皮程度(1~4mm)とする。体調に応じて皮膚に接触するだけの鍣鍼を使用した。鍣鍼は補法には金製、瀉法には銀製を使用。

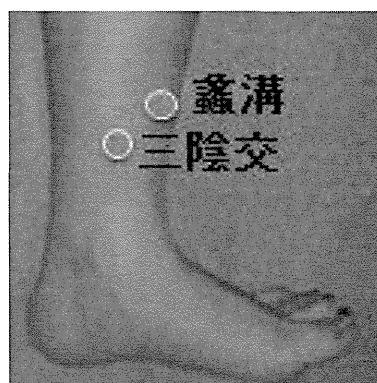
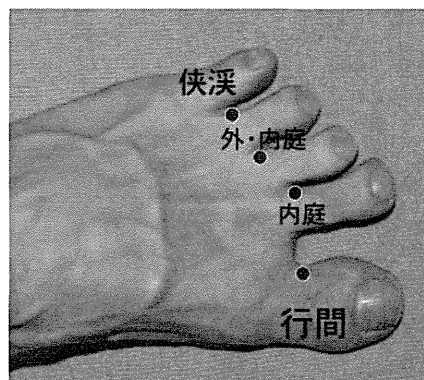
使用経穴はその日の患者の状態に応じて、行間、内庭、外・内庭、侠溪、蠡溝を使用。後日、活血化癥のために三陰交を追加。

【結果】一回の治療では直後効果は不明だったが、時間をおいたところ、以前よりも楽であった事を自覚、また、手の震えが以前より落ち着き、継続的治療を望まれた。気虚・血虚に対する治療数を重ねていくことで、NRS=6~7→2~3まで軽減。しかし、NRS=2~3以下になることは治療直後でもなかった。そこで、舌下静脈の怒張、細絡、爪の血色の悪さから癥血と判断し、活血化

癥の治療を追加したところ、治療直後NRS=1と減少できた。

さらには、治療介入時よりも院内を散歩する事が多くなり、活動的になってきたことから、著効の認められた一例と言える。

【治療開始時の状態】ターミナル前期



20110003 (No. 25)

【症例】87歳、男性。

【傷病】胃癌（一部切除）

【目的】肩こりで看護スタッフからドクターに依頼がされた

【東洋医学的所見】

鍼灸治療介入時、症状に関して質問するが、「揉んでもらうと気持ちいいだけで、これと言って日常生活で困っているほどではない。強いていうなら、食事をして戻ってくるくらい」という、依頼とは異なるものだった。胃の滑、淡紅舌、白膩苔、甘い物を好む。肩は張ったような感じという事から、気虚・気滞と考え、疏肝理気を目的に始める。

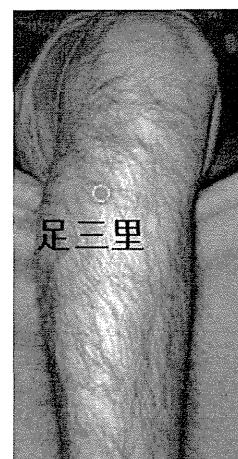
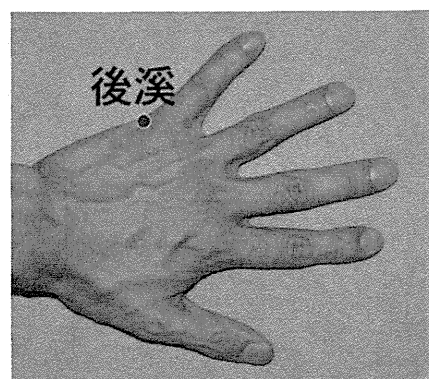
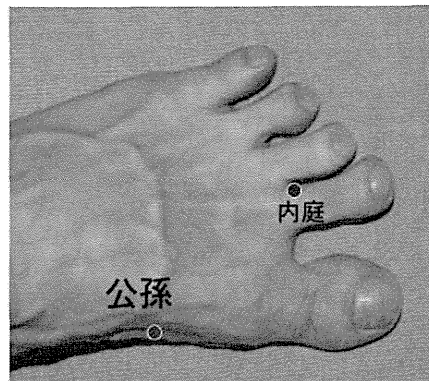
【治療方法】

使用鍼：鍼灸治療が初めてだということで、鍔鍼を中心に使用。補法には金製、瀉法には銀製を使用。使用経穴は一診目合谷、後溪、公孫、二診目内庭、三陰交、足三里を使用。

【結果】

今回、依頼目的は生活に支障がないというものであり、「全然平気やで。何ともないけど揉んでもらったら気持ちがいいだけ」と評価もとることはできなかった。また、食欲低下も患者本人は苦痛に感じてはいなかったため、NRS=0。しかし、鍼灸治療2回の治療を行った後、食欲が少し増したことで、狭窄していた箇所のカテーテル留置を行うため、他病院への一時的転院するに至った。

【治療開始時の状態】ターミナル中期



20110004(No. 26)

【症例】78歳、男性。

【傷病】再発性肝癌、腹水

【目的】坐骨神経痛

【東洋医学的所見】

2年前に転倒し、いくつかの病院を回ったが、コルセットか湿布を出されるだけで鍼灸治療を受けたかったが、医師からはそんな言葉を言われなかったのでコルセットと湿布で我慢していた。じっとしていると痛みはないが、起き上がりや、長時間の座位で腰部から下腿にかけてズキッとする痛みがある。50年以上前に腰椎捻挫を起こすなど、腰を良く痛めやすかった。

夜間はよく眠れる。裏虚実挟雑寒熱錯雜、腎気虚、気虚・気滞・血瘀と考え、補腎・疏肝理気を目的に治療を開始する。

【治療方法】

使用鍼：直径0.12mm、長さ1.5cm（セイリン製5分-02番鍼）を使用し、刺入深度は切皮程度（1~4mm）とする。使用経穴は状態に応じて、後溪、侠溪、志室、三陰交、L2-3 俠脊穴に行った。

【結果】

治療前後では状態が分からないということで評価できなかったため、毎回治療前の状態変化をみていくことにした。鍼灸治療介入前、動作時NRS=10、安静時NRS=0であり、痛みも1診目から7診までNRS=10と訴えていたが、詳しく聴取すると、大きく動作した時は10であり、それ以外のちょっとした動作は1~2程度の痛みになっているとの事だった。したがって、鍼灸治療を介入することで、突発的な痛みに対する除痛はできなかったが、日常動作における痛みはある程度コントロールができ、死前期

直前まで麻薬投薬量を増量せずに済んだ症例である。

【治療開始時の状態】ターミナル中期

